



<https://www.zenginkyo.or.jp/>

年 組 番 名前：

生活設計

マネープランゲーム

資料集



一般社団法人 **全国銀行協会**

『生活設計・マネープランゲーム』のご紹介

みなさんは、これから進学したり就職したり、

いろいろな道に進んでいくと思います。

大人になれば、結婚して、子どもを育てていくかもしれません。

家や車の購入を検討することも出てくるでしょう。

みなさんにとっての理想の人生とは、どのような人生なのでしょう。

そしてテレビや新聞でよく耳にする「生活設計」や

「マネープラン」とはどのようなことなのでしょう。

難しく考える必要はありません。

「生活設計・マネープランゲーム」を体験することで、

楽しみながら自分の人生やお金との関わり方を考えてみましょう。

2018年11月
全国銀行協会

CONTENTS

- 1 非消費支出とは
1ページ
年代別・家族構成別 非消費支出一覧
2-3ページ
- 2 人生の三大資金と結婚資金
4-5ページ
- 3 ローンについて
6-7ページ
- 4 働き方の選択肢
8-9ページ
さまざまな職業(例)
10-11ページ
- 5 インフレとデフレ
12-13ページ

1 非消費支出とは

生活設計は、**収入**があってはじめて成り立ちます。

「収入」に見合った「支出」の計画、つまり、収入と支出のバランスが大切です。

収入は、職業や働き方などによって異なりますが、働いて得た給与や所得は、

すべて自由に使えるわけではなく、給与からは**税金**や**社会保険料**が差し引かれます。

(自営業者の場合は、自分で納めます。)

税金や社会保険料などのように、自分で自由に使う(消費する)ことができない支出のことを

「**非消費支出**」といいます。

収入から非消費支出を差し引いた範囲で生活にかかる支出の計画を立てます。

全銀 悟の給与明細例

年月	従業員 NO.		氏名				
2018年6月	123-55		全銀 悟 様				
支給額	基本給	時間外手当	通勤手当	家族手当	資格手当	住宅手当	総支給額
	150,000	20,000	10,000	0	0	20,000	200,000
控除額	社会保険料				税金		控除総額
	健康保険	厚生年金	雇用保険	介護保険	所得税	住民税	
	10,040	17,830	1,000	0	4,370	12,200	45,440
							差引支給額
							154,560



非消費支出

※上記の金額は一例であり、実際の金額とは異なる場合があります。

いろいろなお金の使い方

お金の使い方は様々です。食費や被服費、光熱費、通学や通勤の交通費などは、

「**生きていくために必要なお金**」です。また、ゲームやマンガなどの遊びに使うお金や、

旅行費用などは「**生活を豊かにするためのお金**」です。そして、税金や結婚式のお祝いなど、

「**社会や他の人のために使うお金**」もあります。

これらのお金を必要に応じてバランスよく使っていくことが大切です。

主なお金の使い方

1 生きていくために必要なお金	2 生活を豊かにするためのお金	3 社会や他の人のために使うお金
衣食住関連費 食費、被服費、家賃など	教育関連費 塾代、参考書代など	税金 消費税、所得税など
光熱水道費 電気、水道、ガスなど	趣味関連費 ゲーム、本、マンガなど	社会保険 健康保険、雇用保険など
保険医療費 治療費、薬代など	レジャー関連費 旅行代、夕食代など	交際費 お祝い、お見舞いなど
交通通信費 定期代、電話代など	貯蓄 ※①、②の場合もあります	その他 寄付金など

年代別・家族構成別 非消費支出一覧

20歳代

年収	非消費支出	差引支給額
250万円	50万円	200万円
300万円	60万円	240万円
400万円	85万円	315万円

30歳代

結婚しない

年収	非消費支出	差引支給額
300万円	60万円	240万円
500万円	110万円	390万円
700万円	175万円	525万円

30歳代

結婚する・働くのは一人

年収	子ども	非消費支出	差引支給額
300万円	いない	55万円	245万円
	1人	35万円	265万円
	2人	25万円	275万円
	3人	10万円	290万円
500万円	いない	105万円	395万円
	1人	85万円	415万円
	2人	75万円	425万円
	3人	60万円	440万円
700万円	いない	165万円	535万円
	1人	145万円	555万円
	2人	135万円	565万円
	3人	120万円	580万円

結婚する・二人とも働く

年収	子ども	非消費支出	差引支給額
450万円	いない	85万円	365万円
	1人	65万円	385万円
	2人	55万円	395万円
	3人	40万円	410万円
750万円	いない	160万円	590万円
	1人	140万円	610万円
	2人	130万円	620万円
	3人	120万円	630万円
1,050万円	いない	250万円	800万円
	1人	230万円	820万円
	2人	220万円	830万円
	3人	205万円	845万円

40歳代・50歳代

結婚する・働くのは一人

年収	子ども	非消費支出	差引支給額
250万円	いない	45万円	205万円
	1人	40万円	210万円
	2人	20万円	230万円
	3人	10万円	240万円
300万円	いない	55万円	245万円
	1人	50万円	250万円
	2人	35万円	265万円
	3人	20万円	280万円
320万円	いない	60万円	260万円
	1人	55万円	265万円
	2人	40万円	280万円
	3人	25万円	295万円
350万円	いない	70万円	280万円
	1人	65万円	285万円
	2人	45万円	305万円
	3人	35万円	315万円
360万円	いない	70万円	290万円
	1人	65万円	295万円
	2人	50万円	310万円
	3人	35万円	325万円
400万円	いない	85万円	315万円
	1人	80万円	320万円
	2人	60万円	340万円
	3人	50万円	350万円
480万円	いない	105万円	375万円
	1人	95万円	385万円
	2人	75万円	405万円
	3人	65万円	415万円
500万円	いない	105万円	395万円
	1人	100万円	400万円
	2人	80万円	420万円
	3人	70万円	430万円
560万円	いない	120万円	440万円
	1人	120万円	440万円
	2人	100万円	460万円
	3人	90万円	470万円
600万円	いない	135万円	465万円
	1人	130万円	470万円
	2人	110万円	490万円
	3人	100万円	500万円

年収	子ども	非消費支出	差引支給額
700万円	いない	170万円	530万円
	1人	160万円	540万円
	2人	140万円	560万円
	3人	130万円	570万円
800万円	いない	200万円	600万円
	1人	190万円	610万円
	2人	170万円	630万円
	3人	160万円	640万円
840万円	いない	215万円	625万円
	1人	200万円	640万円
	2人	185万円	655万円
	3人	170万円	670万円
960万円	いない	250万円	710万円
	1人	240万円	720万円
	2人	220万円	740万円
	3人	210万円	750万円
1,000万円	いない	275万円	725万円
	1人	265万円	735万円
	2人	260万円	740万円
	3人	250万円	750万円
1,200万円	いない	345万円	855万円
	1人	330万円	870万円
	2人	325万円	875万円
	3人	320万円	880万円
1,400万円	いない	430万円	970万円
	1人	415万円	985万円
	2人	410万円	990万円
	3人	405万円	995万円
1,440万円	いない	450万円	990万円
	1人	435万円	1,005万円
	2人	430万円	1,010万円
	3人	425万円	1,015万円
2,000万円	いない	700万円	1,300万円
	1人	690万円	1,310万円
	2人	680万円	1,320万円
	3人	675万円	1,325万円
2,400万円	いない	890万円	1,510万円
	1人	880万円	1,520万円
	2人	870万円	1,530万円
	3人	865万円	1,535万円

年代別・家族構成別 非消費支出一覧

40歳代・50歳代

結婚しない

年収	非消費支出	差引支給額
250万円	50万円	200万円
300万円	60万円	240万円
320万円	65万円	255万円
350万円	75万円	275万円
360万円	80万円	280万円
400万円	85万円	315万円
480万円	110万円	370万円
500万円	115万円	385万円
560万円	135万円	425万円
600万円	145万円	455万円
700万円	180万円	520万円
800万円	210万円	590万円
840万円	225万円	615万円
960万円	260万円	700万円
1,000万円	275万円	725万円
1,200万円	345万円	855万円
1,400万円	430万円	970万円
1,440万円	450万円	990万円

年収	非消費支出	差引支給額
2,000万円	700万円	1,300万円
2,400万円	890万円	1,510万円

40歳代・50歳代

結婚する・二人とも働く

年収	子ども	非消費支出	差引支給額
375万円	いない	65万円	310万円
	1人	60万円	315万円
	2人	40万円	335万円
	3人	30万円	345万円
450万円	いない	85万円	365万円
	1人	80万円	370万円
	2人	60万円	390万円
	3人	50万円	400万円
480万円	いない	100万円	380万円
	1人	90万円	390万円
	2人	75万円	405万円
	3人	60万円	420万円
525万円	いない	110万円	415万円
	1人	105万円	420万円
	2人	85万円	440万円
	3人	75万円	450万円
540万円	いない	110万円	430万円
	1人	110万円	430万円
	2人	90万円	450万円
	3人	75万円	465万円
600万円	いない	130万円	470万円
	1人	125万円	475万円
	2人	105万円	495万円
	3人	95万円	505万円
720万円	いない	160万円	560万円
	1人	155万円	565万円
	2人	135万円	585万円
	3人	125万円	595万円
750万円	いない	165万円	585万円
	1人	155万円	595万円
	2人	140万円	610万円
	3人	125万円	625万円
840万円	いない	190万円	650万円
	1人	185万円	655万円
	2人	165万円	675万円
	3人	155万円	685万円
900万円	いない	205万円	695万円
	1人	200万円	700万円
	2人	180万円	720万円
	3人	170万円	730万円

年収	子ども	非消費支出	差引支給額
1,050万円	いない	255万円	795万円
	1人	245万円	805万円
	2人	225万円	825万円
	3人	215万円	835万円
1,200万円	いない	300万円	900万円
	1人	290万円	910万円
	2人	260万円	940万円
	3人	235万円	965万円
1,260万円	いない	315万円	945万円
	1人	305万円	955万円
	2人	275万円	985万円
	3人	250万円	1,010万円
1,440万円	いない	375万円	1,065万円
	1人	360万円	1,080万円
	2人	330万円	1,110万円
	3人	310万円	1,130万円
1,500万円	いない	390万円	1,110万円
	1人	380万円	1,120万円
	2人	350万円	1,150万円
	3人	325万円	1,175万円
1,800万円	いない	485万円	1,315万円
	1人	475万円	1,325万円
	2人	445万円	1,355万円
	3人	420万円	1,380万円
2,100万円	いない	605万円	1,495万円
	1人	595万円	1,505万円
	2人	565万円	1,535万円
	3人	540万円	1,560万円
2,160万円	いない	630万円	1,530万円
	1人	620万円	1,540万円
	2人	590万円	1,570万円
	3人	565万円	1,595万円
3,000万円	いない	975万円	2,025万円
	1人	960万円	2,040万円
	2人	930万円	2,070万円
	3人	905万円	2,095万円
3,600万円	いない	1,230万円	2,370万円
	1人	1,220万円	2,380万円
	2人	1,195万円	2,405万円
	3人	1,185万円	2,415万円

※非消費支出＝健康保険・介護保険・厚生年金・雇用保険・所得税・住民税の合計

※一覧中の非消費支出は児童手当受給額等を考慮していますが、あくまでゲーム用の概算であり、実際の金額とは異なります。

2 人生の三大資金と結婚資金

多くの人に共通するライフイベントは、「住宅の購入」「子どもの教育」「老後の生活」の3つで、それぞれのライフイベントに必要な資金のことを、**人生の三大資金（住宅資金・教育資金・老後資金）**といいます。また、結婚をする際にも大きな資金（**結婚資金**）が必要となります。

① [住宅資金]

目安の金額 **4,039万円**
(土地付き注文住宅購入の場合)

*1 出典：住宅金融支援機構「2017年度フラット35利用者調査」

家を借りたり、購入する際に必要となる資金。購入するにはお金を貯めてから買う、ローンで買うという二つの方法がありますが、どちらも今後の生活設計を考えたいうえで検討する必要があります。



② [教育資金]

目安の金額 **930万円**
(幼稚園～高校が公立、大学は私立文系の場合の入学金・授業料等)
参考……下宿・アパート等に住む大学生の1年間の生活費 220万円

*2 出典：文部科学省「平成28年度 子供の学習費調査」「平成28年度 私立大学入学者に係る初年度学生納付金平均額(定員1人当たり)の調査結果について」より試算、日本学生支援機構「平成28年度 学生生活調査結果」

子どもの成長に伴って、学校などの教育費が必要となります。進学先が公立か私立かなどによっても金額は異なり、奨学金や教育ローンを利用することも考えられます。



③ [老後資金]

目安の金額 **1,636万円**
(夫65歳以上、妻60歳以上の夫婦のみの無職世帯の25年間の実支出7,912万円一年金などの実収入6,276万円)

*3 出典：総務省「家計調査報告(家計収支編)平成29年(2017年)平均速報結果」より試算

一般的に退職後は年金が収入の中心となりますが、それだけでは不足することが多いので、事前に準備しておくことが必要になります。必要な額は、老後の暮らし方によっても異なります。



④ [結婚資金]

目安の金額 **463万円**
(うち挙式・披露宴355万円、新婚旅行61万円)

*4 出典：リクルートマーケティングパートナーズ「ゼクシィ結婚トレンド調査2017」

結婚式にかかる費用は結婚式のスタイルや式場、日取りなどによって異なります。費用をどのように準備するか、二人で話し合っておく必要があります。



3 ローンについて

「ローン」(loan)は、「お金を貸す」という意味で使われます。

「ローンで買い物をする」とは、
つまり「(銀行などから)お金を借りて買い物をする」

ということになります。家族で住める家を買う、進学に必要な学費を支払うなど、
まとまったお金が必要ときに、手持ちのお金(貯蓄)だけでは足りないことがあります。
たくさんのお金を貯めるまでには、何年・何十年もかかってしまいますが、そんなに待てないことも。

後から少しずつ必ず返す約束をして、
先にお金を借りて必要なときにお金を使いたい。

そんなときに「ローン」はとても便利です。

ただし、お金を借りて買うということは、**将来の収入を見込んで、**

先にお金の使い方を決めてしまうことですので、慎重に考えることが必要です。

ローンの種類

「ローン」で買う代表的なものには「住宅(家やマンション)」、「自動車」などがあります。

そのほか、入学金や授業料などの学費をローンで支払うこともあります。

これらは、使用目的が決まったローンであることから、

それぞれ「住宅ローン」、「自動車ローン」、「教育ローン」などと呼ばれます。

このほか、使用目的を特定しない「カードローン」もあります。

一般的に、目的が決まっているローンのほうが、金利が低くなっています。

主なローンの種類

名称	住宅 ローン	自動車 ローン	教育 ローン	カード ローン
目的	家や土地・ マンションを買う	自動車を買う	入学金や授業料などを 支払う	自由に使える (ただし金利は高め)
一般的な 返済期間	~35年	~7年	~10年	数ヶ月から 10年程度まで

「金利」と「頭金」を考えよう

「ローン」を利用する際には「金利」と「頭金」を考えることが大切です。

ローンは借りる金額・期間・目的等に応じて所定の利率の「金利」が付きます。

これは「**お金のレンタル料**」のようなものです。この金利にもとづいて支払うのが「利息」です。

使用目的を特定しないもの、期間が長いものは、

一般的に金利が高くなるので、支払う利息は多くなります。

また、家や車をローンで買うときには、**そのとき自分が持っているお金を「頭金」として払うことができます。**

頭金を払うことで、**借りるお金が減るので、利息も少なくて済みます。**

この「金利」の利率、「頭金」の金額の違いによって、

ローンで支払う合計支払額が大きく違ってくるため、注意が必要です。

金利 と 頭金 でこんなに違う!?

(例)



※返済期間(毎月の返済額)によっても差が出てきます。税金、手数料は省いて計算しています。

借りるためには「信用」が必要

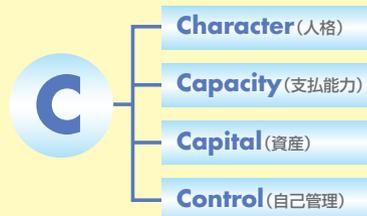
「ローン」は、誰でもいくらでも借りられるわけではありません。

借りるためには「信用」が必要です。ここでいう「信用」とは、
一般的な「約束を守る」や「うそをつかない」という「信用」とは少し違います。

銀行などからお金を借りるための「信用」には、その人の「**支払能力**」、「**資産**」なども必要になります。
つまり、**約束どおり返済するという意志(人格)**、支払の裏付けとなる「**収入**(給料など)や、
万が一、**収入がなくなったときでも支払が可能な資産**、
それらを自分できちんと管理できる能力です。

これらの「信用」が十分ないと「ローン」を利用することが難しくなります。

信用のある人の 4つの



4 働き方の選択肢

みなさんは、将来の「働き方」について考えたことはありますか？

ほとんどの人は、高校や専門学校・大学を卒業したら

「会社に勤める」（勤め人）と選んでいるのではないのでしょうか。

しかし、働き方にはいくつもの選択肢があります。

ここでは3つの主な働き方、「会社に勤める」、「起業する」、「フリーランス」という働き方について見ていきたいと思います。

1 会社に勤める（勤め人）

「勤め人」とは、事業主に雇用されて、仕事の対価として報酬をもらう人、全ての人のことです。代表的な職業としては、会社員や教師があります。

メリット

- 給料がもらえる、退職金がもらえる
- 休暇を取ることができる
- 会社の仕事を通じて実力が身につく
- 大きな仕事、興味深いプロジェクトに関わることができる場合もある

デメリット

- 給料の上限が、ある程度決まっている
- 仕事の自由度が低い
- 転勤がある
- 好きな仕事、やりたい仕事ができるとは限らない

勤め人は、個人の意志や自由が制限されるかわりに、毎月決まった日に一定額の給料をもらうことができ、ある程度安定した生活を送ることができます。



2 起業する

「起業する」とは、自分が経営者となり仕事を創り出していくことです。

メリット

- 自分のやりたい仕事ができる
- 実力次第で、いくらでも収入が増える
- 「会社」として、事業を拡大できる
- 定年退職がない

デメリット

- 起業資金が必要となる
- 成功も失敗も全て、自己責任になる
- 収入が0円になる場合もある
- 退職金がない場合が多い

起業して経営者になるということは、全てが自己責任となり能動的に活動する必要があります。



3 フリーランス

特定の企業や団体、組織に所属せず、自らの才覚や技能を活かして社会的に独立した個人事業主のことです。代表的な職業としては、クリエイターやコーディネーターがあります。

メリット

- 自分のやりたい仕事ができる
- 誰にも束縛されずに、自由に仕事ができる
- 実力次第で、いくらでも収入が増える
- 様々な人と関わることができる

デメリット

- 自分で交渉して仕事を得なければならない
- 他の働き方以上に時間などの自己管理能力が問われる
- 収入が0円になる場合もある
- 審査基準が厳しく、ローンやクレジット契約ができない場合がある

フリーランスは、スケジュール管理・経費管理など全て自己責任です。しかしそれらの問題をクリアできれば、自分の能力を最大限に生かし、好きな仕事で収入を得ることができます。



※3つの主な働き方のメリット・デメリットの例を記載しており、実際とは異なる場合があります。

「働く」ことを考える

「働く」ことは「生きる」ことです。

将来どんな仕事をするかということは、どんな生き方をするかにつながります。

働いて、その対価としてお金を得て生活をする、自分自身が成長していく、

社会に役立つものやサービスを生み出して貢献するなど、

働くことには様々な意味があります。



さまざまな職業(例)

職業	この仕事に就くためには？	働き方		
		勤め人	起業	フリーランス
 ● 会社員 サラリーマン・ビジネスマンとも呼ばれる。企業に勤める「会社員」。企業で働き、様々な分野で社会を支えています。	一言で「会社員」といっても、どのような仕事をしたいのかで大きく異なります。専門的な知識や技術が必要な職種については、専門学校や大学で学ぶ必要があります。	★		
 ● 教師 「教育」の専門家として学校で授業を行う「先生」です。子どもたちに知識と夢を与える大切な仕事です。	教師になるためには「教員免許」の取得と、教員採用試験での合格が必要になります。教師になるためには専門的な教育を受ける必要があります。	★		
 ● 公務員 国や地域のために働く公務員。公務員にも様々な職種がありますが、「みんなのために」が大事な仕事です。	公務員は、「国家公務員」（中央庁庁など）、「地方公務員」（県庁、市役所など）があります。それぞれ採用試験を受け、合格することで就職することができます。	★		
 ● 警察官・消防士・自衛官 みんなの生活を守ってくれる、頼りがいのある人たちです。正義感と勇気あふれるあなたにはうってつけの仕事です。	警察官・消防士は自治体の「地方公務員」、自衛官は「特別国家公務員」です。それぞれ採用試験に合格し、規定の訓練を終了して、仕事に就きます。	★		
 ● 保育士・幼稚園教諭 小さな子供の健やかな成長を助ける、保育士、幼稚園教諭。子供が好きな人にはぴったりの仕事です。	保育園の「保育士」と幼稚園の「幼稚園教諭」は、それぞれ別の資格が必要です。自分がやりたい仕事に合わせて、勉強、資格の取得をしましょう。	★		
 ● 看護師・介護福祉士 病気が、体が不自由で困っている人々を、専門知識と暖かい心でサポートしてくれる専門職です。	看護師・介護福祉士は国家資格です。専門の学校を卒業し、国家資格を取得する必要があります。	★		
 ● 医師・歯科医師・薬剤師 医療と薬の専門知識で人の健康を守る専門家。命を預かる仕事として、責任感とやりがいがある仕事です。	医師・歯科医師・薬剤師はともに国家資格が必要です。また大学で6年以上の勉強が必要です。命に関わる仕事ですので、学ぶ内容は多く、そして訓練期間も長くなります。	★	★	
 ● 美容師・理容師 おしゃれの決め手、ヘアカット・セットやメイクアップをする仕事です。おしゃれなあなたにぴったりです。	美容師・理容師になるには、専門学校で指定の美技と学科を勉強し、試験を受け、資格を取得する必要があります。人の体の一部にはさみを入れる仕事ですから、しっかりと技術と知識を身に付けたいといけません。	★	★	
 ● トリマー・獣医師 家族の一員であるペットの、健康や身だしなみの専門家として活躍する、動物好きなあなたにぴったりの仕事です。	トリマーになるには、国家資格などの資格は必要ありませんが、専門学校などで専門知識を習得する必要があります。獣医師は、人間の医師同様、「獣医師」免許の取得が必要です。	★	★	

職業	この仕事に就くためには？	働き方		
		勤め人	起業	フリーランス
 ● ショップ店員 お客様におすすめの商品を案内したり、素敵なコーディネート提案をする、接客が好きなあなたにぴったりの仕事です。	ショップ店員には、特に必要な資格はありません。自分が取り扱う商品に関する知識や思い入れ、接客技術などが仕事の鍵になります。	★	★	
 ● 料理人・パティシエ おいしい料理やお菓子で、お客様の笑顔をつくる素敵なお仕事です。芸術性も生かれますよ。	料理人には「調理師免許」「栄養士」、パティシエには「製菓衛生士」など関連資格はありますが、仕事をするために絶対必要なものではありません。技術や知識をどのように磨くかが、仕事の鍵となります。	★	★	
 ● 弁護士・司法書士 「法律」の専門家で、基本的人権や社会のルールを守り、問題を解決する仕事です。	弁護士・司法書士ともに国家資格が必要です。「司法試験」は最難関の試験と言われており、受験資格を取得するまでに、かなり勉強しなくてはなりません。	★	★	
 ● クリエイター（デザイナー、写真家、小説家など） あなたの想像力と表現力をフルに発揮し、世の中に様々な新しいものを創造（クリエイト）する仕事です。	専門的な知識や技術が必要なものについては専門学校や大学で学ぶ必要があります。しかし、独学で知識と技術を身に付ける人や、著名なクリエイターの人を「先生」にして、見習いをしながら修業する人もいます。	★		★
 ● プログラマー・システムエンジニア コンピューターを動かすためのシステムやソフトを作成する、現代社会には欠かせない仕事です。	システム開発には特に資格は必要ありませんが、最新の技術に対する専門知識を得るために、専門学校や大学で学ぶ人もいます。	★		★
 ● プロスポーツ選手 プロ野球やJリーグで活躍するプロスポーツ選手。才能を生かして、スーパースターを目指そう！	高校や大学の部活やクラブチームで活躍し、プロチームからスカウトされたり、プロテストを受けて合格する方法があります。また「プロ」以外にも、企業のクラブチームで「セミプロ」として活躍する方法もあります。			★
 ● タレント・俳優・歌手 テレビや舞台で、人の心を魅了し、楽しませる仕事です。特徴あるキャラクターと才能が必要な仕事です。	この仕事に就くための明確な進路はありません。最近では、お笑いタレントや歌手の養成講座なども増えてきました。			★
 ● 農業・漁業・林業 畑や田んぼ、海や川、山や林などが職場。私たちの衣食住を支える大切な仕事です。	家業を継ぐ形で仕事に就くほか、専門的な教育を受けて仕事に就く方法もあります。特別な資格が必要な仕事もあります。	★	★	
 ● コーディネーター（インテリア、フード、ファッションなど） お店のインテリアや、メニュー開発など専門知識を生かしてアドバイスをを行う仕事です。あなたのセンスが光ります。	コーディネーターになるために特別な学歴や国家資格はありませんが、専門学校や通信教育などで民間の資格を取るともいます。また、就職してから経験を積んで資格を取る人もいます。	★		★
 ● 通訳 異なる国の言葉を、お互いの国の言葉に訳す仕事です。国際的な活躍をしたいあなたにぴったりです。	特に資格は必要ありませんが、高度な語学力が必要です。外国語学校や海外留学などを体験する人が多く、語学だけでなく話し手の感情を理解する能力が求められます。	★		★

※働き方の分類は例であり、必ずしも現実と当てはまるわけではありません。

